

森先生、約50年ぶりの講義をありがとうございました！

文化は周辺との関係で生まれる

● 50年目ぶりに森先生の講義を受けて！

9月28日(土)の浦高25期会「15歳で出会って50年目の同期会」のメインは2つありました。1つは久々に同期の皆さんと語り、楽しいひと時を共有することで、もう1つは森先生の講義を約50年振りに聴くことでした。

森朝男(もり あさお、1940年-)先生は、日本の国文学者。フェリス女学院大学名誉教授。博士(文学)。専攻は上代文学、特に万葉集です。1959年埼玉県立浦和高等学校〔11回〕卒業、1964年早稲田大学文学部国文科卒業、1970年同大学院博士課程中退。1970年浦和高等学校教諭、相模女子大学助教授、1981年教授を経て、1990年フェリス女学院大学文学部教授。2007年定年退任、名誉教授。2003年「恋と禁忌の古代文芸史 日本文芸における美の起源」で博士(文学)(早稲田大学)。2012年、『古歌に尋ねよ』で第20回ながらみ書房出版賞受賞。〔一部ウィキペディアフリー百科事典引用〕



今回、森先生には御専門が「万葉集」ということで、「元号『令和』の話」をお願いしました。森先生のお話を記す前に、少しだけ元号のことを綴っておきましょう【日経新聞記事より引用】。

◇ ◇

■イチから分かる元号 最長は？ 最多漢字は？

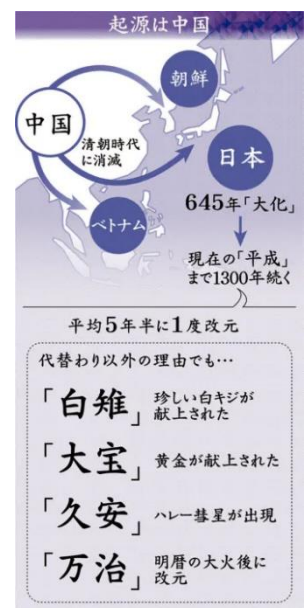
5月1日の改元にあたり、「平成」に続く元号「令和」が4月1日に発表された。元号は人々の生活の中に深く根差し、しばしば歴史上の出来事や社会と結びつけられて記憶されてきた。元号とはどんなものだろう。改めて考えてみたい。

◆起源は中国、かつてはベトナム、朝鮮でも

日本最初の元号は「大化」。645年、中大兄皇子らによる「大化の改新」で天皇中心の中央集権的な国家づくりが始まったころに定められた。7世紀に一時の中断期があったのを除いて「令和」まで連続と続き、その数は248に上る。元号は、古代中国で君主が時間をも支配するという思想のもと、紀元前140年、前漢の武帝の時代に誕生した制度だが、現在でも使用されているのは日本だけ。「本家」中国では約2千年後の清朝を最後に消滅し、西暦が使われるようになった。

◆248の元号、改元ペースは平均5年半に1度

明治以降、改元は天皇の即位に伴う「代始(だいはじめ)改元」となり、天皇一代に一つの元号が定められる「一世一元」が確立した。ただ、歴史をひもとけば改元はもっと頻繁に行われている。「大化」元年(645年)から平成31年(2019年)までに使われた元号は247。平均して5年半に1度のペースで改元が繰り返されていたことになる。



最も長く使われた元号

1位	「昭和」	62年
2位	「明治」	43年9カ月
3位	「応永」	33年10カ月
4位	「平成」	30年3カ月
3位	「元仁」	5カ月
2位	「天平感宝」	3カ月
4文字は奈良時代の5元号のみ		
1位	「暦仁」	2カ月
最も短い元号		

改元の理由の一つが、吉兆が現れたことによる「祥瑞（しょうずい）改元」。「大化の改新」から5年後の650年、珍しい白キジが天皇に献上されたのを祝し、「白雉（はくち）」と改められた。このほか黄金が献上されると「大宝」（701年）、体を癒やす泉が見つかり「養老」（717年）と改元された。平安以降は災害、干ばつ、疫病流行、彗星（すいせい）の出現などによる「災異改元」が多い。語呂の悪さで改元した例もある。江戸時代の「明和9年」に大火災や水害があり「迷惑年」と読めるため「安永」に変えたといわれている。

ちなみに歴代の元号の中で最も長く使われたのが「昭和」の62年。次に「明治」（43年9カ月）、室町時代の「応永」（33年10カ月）と続き、4番目に「平成」（30年3カ月）がランクインする。一方、最も短いのが「暦仁（りやくじん）」の2カ月と14日。

◆「令和」以外の出典は漢籍。漢字は73文字

「日本年号史大事典」などによれば、「大化」から「令和」まで248の年号に使用されている漢字は合計73。最も多いのが「永」（29回）で、よりよき時代が永く続くようにとの願いが込められている。その次に多いのが「元」と「天」の27回で、「治」（21回）、「応」「和」（20回）と続く。「令」は初出。日中の元号を比較すると、中国でもトップは日本と同じく「元」（46回）と「永」（34回）。ただ王朝交代を重ねたからか、「始」「建」「興」といった勇ましい文字が目立つのに対し、日本では中国で使われたことのない「寛」「保」「龜」といった穏やかな文字が多い。奈良時代に続いた「天平感宝」（749年）など4文字の5元号を除けば、全て漢字2文字で、重複が無い。

「平成」までの出典は77種で全て漢籍。「令和」は初めて和書である万葉集を出典とした。大部分は唐以前の古典で、最多は「書経」の36回だ。次いで「易経」27回、「文選」25回、「後漢書」24回、「漢書」21回と続き、「四書五経」と呼ばれる儒教の経書や古代中国の歴史書が多い。過去



に選に漏れても、後世に最善案として採用されるというケースも珍しくない。「平成」は幕末の「慶応」改元の際の候補の一つだった。

◆戦後、法的根拠失った期間も

明治期には、旧皇室典範により「一世一元」の原則が明文化。さらに登極令によって、天皇の即位後すぐに改元するよう規定された。だが敗戦でGHQ（連合軍総司令部）の統制下に置かれると、旧皇室典範や登極令は廃止され、新皇室典範から元号に関する規定が消失。元号は法的根拠を失った。「昭和」が「明治」を超えて最長の年号となった昭和45年（1970年）ごろ、元号が「昭和」限りで消滅するのではないかとの危機感から、元号の法制化を求める動きが盛り上がる。その結果、79年6月に元号法が成立。「元号は、政令で定める」「元号は、皇位の継承があった場合に限り改める」という、わずか2項から成る短い法律だが、「一世一元」制の継承が明確に根拠付けられた。【元号ヒストリーは割愛しました。2019/4/1より引用】

明治に「一世一元」明文化

天皇家典範により「一世一元」明文化

GHQの統制下で旧皇室典範廃止。元号の規定消失

1979年元号法が成立

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO42001570U9A300C1000000/>

■元号「令和」の話 森 朝男 先生の講義より

皆さん、こんにちは。今日は25回生の皆さんが「15の春で出会って50年目の同期会」にお招きいただきありがとうございました。私が皆さんとお会いしたのが29歳、それから50年というのも不思議なものを感じます。



今日は、藤江さんから何か話をとと言われて、飯島先生のお話のほう面白いと思ったのですが、改元の年でしかも『万葉集』に縁があるということで、隠居の身ではありますがお話をさせていただきます。

今回の元号改正に当たっては、2月頃から極秘裏に専門家による検討が行われてきて、3月末までに6つの案に絞られたそうです。当初、安倍首相は典拠についてこだわりを持っていなかったようですが、「令和」が発表されると首相が「天皇をたたえる国書よりも万葉集の方がいい」と言ったとか伝えられています。さて、この「令和」は皆さんもご存じのように『万葉集』を典拠とします。『万葉集』は7世紀前半から759年までの約130年間にわたって作られた人々の和歌が20巻に4500首以上収められています。天皇、貴族から下級官吏、防人、大道芸人、農民などさまざまな身分の人たちが詠んだ歌が収められています。

◇ ◇

◆元号「令和」の典拠、万葉集巻の五「梅花歌卅二首」の序

「令和」の典拠は、『万葉集』巻五の「梅花歌卅二首并序（梅花の歌 三十二首、并せて序）」にある一文であるとされています。

「天平二年正月十三日 萃于帥老之宅申宴會也 于時初春令月氣淑風和 梅披鏡前之粉蘭薰珮後之香」〔天平2年正月13日、帥（そち＝長官）老の宅（いえ）に萃（あつ）まりて宴会を申（ひら）く。時に初春の令月、氣淑（うるは）しく風和（やは）らぐ。梅は鏡前の粉を披（ひら）き、蘭は珮（はい＝匂い袋）後の香を薫らす。〕以下、宴席周辺の早春の風景や堤内の様子、それを前に酒杯を交わす、宴の陶然とした気分を述べています。

「若非翰苑何以據情 詩紀落梅之篇 古今夫何異矣 宜賦園梅聊成短詠」〔若（も）し翰苑（かんえん）に非れば、何を以てか情を據（の）べむ。古今何ぞ異ならむ。宜しく宴梅を賦して、聊（いささ）か短詠を成すべし。〕

この序文は、九州に置かれた地方行政機関の太宰府で、そこの「帥」長官の同伴旅人が邸宅で催した宴会の様子を表しています。「梅花の宴（ばいかのうたげ）」と呼ばれるもので、32人が集まった宴を旅人が第三者のような感じで書いています。

そして、32人の和歌が並び、主人の旅人の歌が8番目に出てきます。

◇ ◇

（大貳紀卿）

集歌 815 武都紀多知 波流能吉多良婆 可久斯許曾 烏梅乎乎岐都々 多努之岐乎倍米
訓読 正月（むつき）立ち春の来（き）たらば如（かく）しこそ梅を招（を）きつつ楽しきを経（へ）め
（筑前守山上大夫）

集歌 818 波流佐礼婆 麻豆佐久耶登能 烏梅能波奈 比等利美都々夜 波流比久良佐武
訓読 春さればまづ咲く屋戸（やと）の梅の花独り見つや春日（はるひ）暮らさむ
（豊後守大伴大夫）

集歌 819 余能奈可波 古飛斯宜志恵夜 加久之阿良婆 烏梅能波奈尔母 奈良麻之勿能怨
訓読 世間（よのなか）は恋繁し糸や如（かく）しあらば梅の花にも成らましものを

(主人)

集歌 822 和何則能尔 宇米能波奈知流 比佐可多能 阿米欲里由吉能 那何列久流加母
訓読 吾(わ)が苑(その)に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

◇ ◇

この順番から席順が分かるという学者がいます。8人掛けのテーブルが4つあって第1テーブルの最後に旅人がいるというのです。

◇ ◇



◆当時の文人の教養

政府が盛んに「令和」が『万葉集』で日本の古典を典拠としていると宣伝すると、そうではないという人たちも出てきます。それが元号「令和」に関する中国古典(「令和」の典拠の典拠)です。

①王羲之『蘭亭序』(蘭亭集序、蘭亭記などとも)

永和九年、歳は癸丑(きちう)に在り。暮春(3月)の初め、会稽山陰の蘭亭に会し禊事を修す。・・・是の日や、天朗かに気清く、惠風和らぎ暢(のど)かなり【是日也、天朗気清、惠風和暢】と記されています。

王羲之(おうぎし、西暦303-361)は、六朝東晋の政治家で書家。これは、永和9年(西暦353年)3月3日、王羲之が名士や一族を会稽山の麓の名勝・蘭亭(現在は浙江省紹興市)に招き、総勢42名で曲水の宴を開き、その時に作られた詩27編(蘭亭集)の序文として王が書いたもの(草稿)が『蘭亭序』であります。『万葉集・梅花歌州二首の序』は、この『蘭亭序』に倣うところが多いのです。

②張衡『帰田賦(きでんのふ)』

都邑に遊びて永久なるも、明略の以て時を佐(たす)くるなし。・・・埃塵を超えて以て遐(とお)く逝き、世事と長く辞す。是に仲春の令月、時和(おだ)やかに気清し【於是中春令月、時和気清】原隰(げんしふ)鬱茂し、百草滋栄す。

張衡(張平子、西暦78-139)は後漢時代の政治家。天文学・数学等に通じた学者、文学者。都に出て政治を行ったが、時代を佐けることができなかつた。田舎に帰って原っぱや湿地で遊ぼうという意味の詩で、屈折した心を詠っています。

◇ ◇

漢籍を典拠とすると、王羲之が暮春で旧暦3月、張衡も中春で旧暦2月となり、旅人の正月とは季節が変わりますが、「梅花の宴」は『蘭亭序』を倣って行われて宴会と言えます。政府が「日本独自の『万葉集』を典拠とした」と偏った表現をするよりも、こうした万葉の人々が中国など周辺の国々の文化を知り、それを倣って日本らしい文化として創り上げていったものが「梅花の宴」であると考えたほうが良いと思います。それが当時の文人の教養です。

文化というのは、その国や地域だけでできあがるものではなく、周辺のさまざまな影響を受けながら長い年月を経て創り上げられたものであるということを理解していただきたいと思い、今日は漢籍における「令和」の話をご紹介させていただきました。

『万葉集』は明治時代に西欧列強に追いつけ追い越せの国策から国民国家を作るための国書として利用された経緯があります。そういう国の考えが、今回の改元の流れの中で出たのかもしれない。1つのことだけでなく、周辺のことを知りながら考える必要があります。

ご清聴ありがとうございました。【以上、森先生の講話を香田が要点筆記したものです】

【先生が参考にされた図書：小倉慈司『日本の年号』(吉川弘文館)、米田雄介『歴代天皇・年号事典』(吉川弘文館)、日テレ政治部『ドキュメント「令和」制定』(中公新書ラクレ)】